鉄虎堂電子拾遺　1

丸吉皆川家日誌　慶応三年九月～十二月

佐藤大介　編・著

本書（ＰＤＦファイル）の利用にあたって

1、本書の著作権者は佐藤大介です。

2、本書に用いられている情報を利用する場合、書誌情報および掲載ＵＲＬの表示をお願いします。

また、本書の情報を再利用する場合には、機械的な解析処理等に用いる場合を除き、改変を認めないものとします。

商用利用についても認めないものとします。

3、本書の印刷・出版に関する諸権利は、編者に属します。本ＰＤＦファイルの組み版のまま、およびテキストデータを抽出して別途版下を作成し、印刷・頒布・出版することは認めません。

4、本書の内容を用いた学術、教育、文化活動などで成果物を出された場合、1部の提供をお願いいたします。

＊クリエイティブ・コモンズ・ライセンス　CC BY-NC-ND
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja

鉄虎堂電子拾遺　1
丸吉皆川家日誌　慶応三年九月～十二月

発行日　二〇二〇年三月三一日
発行者　佐藤大介研究室
〒九八〇―八五七二
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉四六八―一
東北大学災害科学国際研究所
〇二二―七五二―二一四三
dsato@irides.tohoku.ac.jp
編著者　佐藤大介　青葉山古文書の会
制作所　蕃山房

＊本書は、文科省科研費・基盤研究（B）課題番号 19H01293
（研究代表者・佐藤大介）による成果の一部である。

鉄虎堂電子拾遺

丸吉皆川家日誌　慶応3年9月〜12月　目次

本書の利用にあたって
凡例
慶応3年9月　8
慶応3年10月　10
慶応3年11月　18
慶応3年12月　31

丸吉皆川家日記　慶応三年四月～十二月

凡例

一、この史料集は、磐井郡藤沢町（現岩手県一関市藤沢町）の商家・丸吉（まるきち）皆川家の代々の当主が記した、天明四年（一七八四）頃より明治五年（一八七二）までの日誌のうち、六代目当主・皆川喜平治が記した、慶応三年（一八六七）九月から同年十二月の部分を翻刻したものに基づいている。

一、史料集には、現所蔵者の皆川龍一氏の了承の上で、当時の政治・社会・文化および環境などについて調査研究する上での参考となる記事を収録した。

一、漢字は原則として常用漢字を用いた。ただし、人名や地名など、原史料の標記通りとした部分もある。

一、助詞として用いられている「与（と）」、「者（は）」、「江（え・へ）」、「而（て）」、「ニ而（にて）」「而已（のみ）」および「并（ならび）」は、原史料の表記のまま、活字を小さくした。

一、「ハ、（はば）」、「ツ、（ずつ）」、については原表記通りとした。
一、「〆」については、銭の単位や重さを示す場合には「貫」に改めた。
一、「ゟ（より）」、「「（こと）」などの合字については原則として現行の仮名に改めた。
一、本文には編著者が適宜読点「、」および並列点「・」を付した。
一、原史料中の欠字は一文字あけ、平出・台頭は原則として原史料の表記に従った。
一、史料の文中、文意の内容や人名・地名の比定などに関わる部分には、適宜その右側に（　）内で傍注を記した。
一、文意の通じない部分などには、その右側に（ママ）を付した。また難読や疑問が残る文字・表現については右側に「（ヵ）」とした。
一、原史料の破損により判読出来ない文字は、字数に応じて□□で示し、字数の不明な部分については［　］で示した。
一、原本で文章の抹消がある場合、抹消部分が読み取れる場合は、原則として抹消線の下に文字を示した。また、追記については原則として本文に挿入しているが、判別が困難な部分は原表記に従った場合もある。

一、史料中、現在の人権意識から見て不適当な語句が使用されている場合があるが、事実に基づく客観的な研究を進める史料として、そのまま掲載した。利用者にはその趣旨を理解されたい。

一、今回の「丸吉皆川家日誌」の翻刻は、青葉山古文書の会により行った。佐藤大介　鵜飼幸子　熊谷新一　志田清一　後藤三夫（順不同）

一、全体の構成・編集は、佐藤大介による。

（慶応三年九月）
一廿二日雨ふり晴、廿三□上日和、廿四日大雨ニ成、此間者至而暖気、節不相当也、

御上之御吟味
生糸商ひ歎々敷取引無之、至而不融通、一統困り申候
御振合ニ而不定也

廿五日日和、晴、曇り

廿七日夜、与右衛門丈下り、色々咄候事、江戸表・諸国之糸荷、当分沢山入着在之候、

御上向之事、当時　将軍様ニハ京大坂ニ□城と申候、併江戸江御下りニハ難為成由也、本将軍之御位ニ不為成、全体御三家并加州・薩州・仙台様、御三方之御連印無之候而者、大将軍ノ御位ニ難為成と申、御連判無之故、未タ大将軍御位ニ不為成由と言、御自身将軍と唱候也、有とも如無か、追々御吟味之由、夏中者江戸御丸之内ニ而大ニ揉合候由也、先将軍様之御台様ハ、如御男の御気姓ニ而、尾州様被為御呼、田安様共ニ御直参、伊勢藤堂様ハ異国人と御指引被蒙候ニ付、御台様ニ被召、御吟味品々御欠合、当時弐家之御政事

より、異人共之取扱風儀共ニ不宜候ニ付、旗本中長之暇ヲ願候抔被仰談、御老中様方も一口一句も不出候風、依而新田万次郎様御登城ニ而、尚又色々と御談シ有而、皆様御開キニ相成候、仍其後ハ御旗本中并其外共、今迄鉄炮筒并袖ナシノ鉄炮着類止而、着者無之、但異人懸り之人計り用へ候由也、尾州様新田万次郎様ニハ御同意ニ而、御台様御同様、藤堂様并御老中様方ハ御席中并ニ聞、御仁之評判も不宜、当役と御吟味も可有候と申、

公義之御吟味ニ候哉、南京江出店被相出、矢張交易商館被相立候事ニ相咄候、是ハ田安様御吟味御懸、商人ニハ三ツ井越後屋也、百万両之見詰故ニ、越後屋より拝借願出候由也、彼ノ地江田安様御渡海可被遊由也、又兵庫ノ津も異国人江御借地ニ成而普請最中、是又交易場所ニ可成、

一御暇願指上候御旗本、其外御侍数百人、御大名様方へ御割合、御預りと成、此故ニ其家々之家来中浪人と成、

一箱根御番所ハ、薩摩御家中ニ、以理ヲ破られ候所、其後者往来御構無之候、其外公義御番所奥出口、近年厳敷被相立候所も、其外共ニ御構無之故、往来事安ク相成候由也、

一長州様之方も、一円何之沙太（沙汰）も無之、如何相成候哉、当時噂無之静也、不分

之事、

右之通之事ニ而、上々様御正体ハ在やら無やら、諸事乱世なり、交易者益々行ひニ相見得候なり、諸国共ニ諸事定法破候物也、追々如何、

当月者小ニ而、廿九之晦日也、当月中者暖気、至而楽成九月也、

刈揚糯も米高直不足ニ而、草糯専ら、尤大方手前切進上、世上も休、無異儀所々計遣、

暦表廿八日大霜と在之候、暦考へ当ル、

十月朔日風至而寒く成、二日朝者昨夜より俄ニ寒強く、大霜下る、二日朝迄、一栗者相応ニ相出候年ニ候得共、在方面々喰料かてニ用候ニ付、市中出売物不足ニ而、小壱升百三拾文より百拾文位迄、此節ハ尤無之候、当年ハ作方共ニ例年より後れ、未タニ麦蒔方不究候、稲もかり揚ケ不究、糯をつき候なり

一肴類も不漁ニ而高直、ふくらいこと申小鰹、壱本弐百六拾文位、

米穀共ニ未タ不下高直ニ而、岡方も浜方ハ殊ニ難義と、本凶年同様と申候、

十月四日より暖気ニ成、五日上々日和、今日より十方暮と成而、六日曇り、七日明方より雨ニ成、八日も雨暖気也、此間一日置雨ふりニ成、中奥通りも存之外稲作不宜、八分位之見当、米直段引上ヶ、中新田・古河（古川）辺六升三盃、東山此辺之作も同様也、

十一日雨、十二日晴、上天気、十三日終日雨ふり、十四日晴、十方暮、今日迄十月之節ニ成

諸相庭直段之事

米者一統吊（カ）敷、何方も不出故ニ而、直段不下候

一古米、当新米四升壱盃
　去年米悪く四升三盃位
　糯米四升

一大麦、壱俵八貫文位
　右品存之外在方売人不足
　尤去年より取入不足

一小麦、拾貫文位
　八貫文

一大ツ、六貫五百文位ニ成
　とふふ廿五文
一小ツ、下る　尤小売計り
　小壱升弐百文より百七八十文
一濁酒、未タ壱盃百文　九拾文ニ成
　　外ハ八拾文位より之由

〆

一当百文銭者、八拾文之割通用御触ニ相成候、
一生糸者、未タ買出し見合居候
　近日買出可申、先達より三十両かへも下直之含也、
御城下江入荷相成候糸荷、未出荷不成故、大まゆ揚り種切まゆ共ニ御指留ニ而、
大ニ虫入損也、大痛ニ成由、此節出荷御免ニ成由、何分拾人衆揉合ニ而如此、
一真綿、両ニ百廿目前後
一口糸、歩ニ七十目位
一大口糸、百目壱貫四百文位
一太ふし糸、当年不売望人無之候

一新葉煙草、至而高直
狼川原上壱歩ニ壱連と申候
余り高直、藤沢口上弐連より三連

煙草ハ、古より此辺り、余村徳田・小梨子、奥方共ニ春葉之場も一統色付を作り、尤右品諸方好ミ、下ハ中形ニ成、直段も大ニ高直なり、天保已来為登莫御留ニ成故、下場も中莫ニ作、御国一体ニ而ハ莫作至而不足ニ成、御国莫計ニ而ハ国用不足と申、他国之莫、御城下并津方〳〵江多く入、近年生糸大ニ高直故流行、中奥并御国一統所々村々蚕ニ而糸仕出し、依之何様当郡抔も穀物并莫作出不足成様ニ相聞へ候、併何分諸品高直ニ而、金銭莫太入増候故ニ、専ら金ニ相成候方へ情を出候なり

一保呂ノ又木、当年蚕を止而莫多作、八百連程故取、但脇葉共ニ一宇ニ而右之数ニ成、連ニ而、右ヲ押込ニ而、金四拾両ニ売払、蚕の糸売より大ニ取勝ニ成と申候、好き金ニ相成、好ましき事也、

十五日晴ニ相成、風寒し、与右衛門衆南部より帰り来る、気仙米直段壱歩ニ三升、南部塩ハ弐升五合、白弐升壱盃壱歩也、

一旅籠代銀拾匁、外銭ニ而壱貫弐百余、但銭相庭両七貫五百文、仍如此、右ハ

南部ニ而出ル新銭也、米壱升六百文余

一糯直段両ニ六分五り三り位

右ハ伊達客人ニ被頼、同道ニ而少々買入ニ成、

一浜海道宿屋ハ米飯相出候得共、気仙ニ而も在方者米無之、稗・粟計り之飯也、

是も客人取扱ニ而も稗計り用ゆ風也、

一十七日朝大霜、尤寒く成、十八日　（記載なし原文のまま）

一此節大こん摘なり、多く盗れ候、当年ハ中の作なり、右町より直段百本より

百廿本附壱駄壱貫弐百文位、肴類不漁ニ而高直、甚諸品高直、困り候世の中也、

一するめ、十干四百文位、四百五十文

一どんこ至而少キ物、弐百文より弐百五十文

一福らいこ、弐百文位也

一木綿・古手・綿、矢張り弥高直

当春より壱割引上

一千草の切、壱尺百八拾文也、並物ニ而如此

一濁酒、壱盃九拾文

一セうゆ（醤油）　壱樽代四貫文

一糀　壱升三百八拾文

今十八日恵比須講、町少立盛る、此間少々日和続ニ而、未ニ麦蒔之所有之候、節も仕事も後れ候年柄、稲かりも在、

今日御地頭様御下リ　朝夕ハ寒成、

一此頃鮪漁在之、追々取れ候、仍而直段下る、六本附壱本ニ而四貫文より気仙沼辺ニ而金弐歩位、跡々不取候ニ付高ク成、（当地三貫八百文）（まくろ也）

一糸方客壱人廿二日下着ス、

横浜生糸ハ沢山荷入、異人ハ一円ニ不買、仍而一統取引休、尤大ニ下直之含ニ而、異国人買入不申候、惣躰休ニ付、金も不相下ヶ候、仍而一先御惣取都ニ相成候ニ付、壱人ニ而藤助殿下り宿方相廻候、八月頃迄九百何拾トロと申直段、七百トロと申事ニ而、弐百トロ之違下落ニ成由、当地糸ニ而三十両余、四十両も不落候而ハ、引合ニ不相成風、此節当地并国方一統よわり売気ニ相成候容子ニ候得共、右行違ニ而、一寸ハ買方不致候吟味ニ而、来月迄ハ休ニ成、

一江戸表、異国人を以、三人御老中御役ニ被相出候由、殊ニ又金銀之札被相出

候由、右糸方へ江戸佐羽屋より仙府之糸買方出張所へ申来候由、藤助殿咄、
御公義如何之御吟味ニ而如斯被成置候哉、　京都より御指支も無御座物歟、
不分り之事、異国江御随順之訳ニ相成候哉と、下々歎ヶ敷咄合致候、

屋形様御事、先日仙南御郡江乗切と言御名義ニ而、御供三拾人程ニ而御出馬被
遊候由、此間気仙御郡奥筋へ後藤孫兵衛様御廻村被成置候由、何様所々御覧
之為か、又ハ軍船御造船之為、御林材木御覧御吟味相成候由之事

十月廿八日、此間天気続、朝ニ霜有之、当秋ハ塩相応ニ出方有、壱俵金弐歩
五百文位直段ニ成、併未タ御渡り村々江無之候、
当年ハ大こんも手作相応ニ而、五・六十駄摘候、大ツハ去年四五俵漸々取候所、
今秋ハ色豆共ニ〆拾弐俵程、取納相応也、
一薄衣御年貢買納相庭直段
一壱俵金拾五切と申候御蔵入并
一ノ関様分御早米納ニ相成、不安直段也
一店物料、壱状上七拾文、次六拾五拾文

一縫はり、九文より拾弐文

蝋燭

百目掛　四十五文
五々　五十文
四五　三十五文

一上杉原　壱枚廿五文

一黒砂糖　金壱歩ニ六百八拾目位

一白同　貫ニテ四拾匁より三拾三匁位　下品也

一茶　山本山と言所　百文ニ七目位
但段落也

一繰綿　坂上大入壱本三拾両三分

一糸わた　壱歩ニ七十五目より八十目

一御城下ニ而下り手拭十枚ニテ三拾弐匁

当年ハ相応ニ取納ニ成

一此節大豆出盛之節ニ候得共、八貫、貫文ニ而売人不足と申候、去年味噌煎不足ニ而、当年ハ皆々右煮方多入用ニ付き、直段高し、

此間者暖気也、未タ雪無之候、西根山江ハ少々ふる、晦日風ニ而寒シ、

十一月朔日朝厚キ霜下り寒し、日和ニ成、先日所々御法事多し、去年延ニ相成、当秋弔ひ多し、同三日朝より四ツ頃迄初雪嵐ニ而、晴ニ成、春雪の如く消流る、風寒し、四日糸弐駄ニ而登る、取都分也、

一当年之清酒造方、大郡者弐軒、小郡者壱軒、御城下ハ八軒程御免ニ被仰渡候所、此近辺ニ而者造方願申上候者無之候、御役金ハ百五拾両、尤米未タ高直ニ而、造方致候者未タ相聞得不申候、然ル所　御城下表町中より願申出、酒屋被相免、造方ニ相成候而者、米直段下ヶ不申、小前町中難義罷成候間、何分酒造方被相減、不足ニ罷成候様被成下度段願申上候ニ付、御酒屋計造方相成、外ハ被相止候由也、在々右ニ付一郡一軒造方御免ニ相成候間、上金次第造人相出可申候間、濁酒屋前年之通一宿壱弐軒ツヽ御免、清酒造人当分無之候、右ニ付而か、南・中奥通、米少々緩ミ候、乍然、当年作合も秋之模様と違、惣毛より取入ハ大ニ落、不宜、何方も兼而上地之所不作、山・沢田抔宜候由也、ならしニ見八分ニ無覚束候と申候、稲の束数より落、又米升数も落候由、

一徳田村作毛御引方、并余村共ニ追々強く願上、漸々御吟味、押付七分三り納之事ニ相成候由、

壱俵直下る

薄衣買納相庭金三両少々余

一米ハ四升五合　小豆高直、金壱歩ニ五升より六升、

一大(大豆)ツ弥々直上り、九貫文より四・五百文迄、　壱俵　金六切也

右米高直ニ而、大ツ用ひ方余慶ニ故、望人多し、殊ニ当年ハ味噌専ら煮方如此、

一葉莢(莨)、秋中望人多く、高直ニ売候処、追新出盛、此節ハ買人無之、追々下落と相成、当時買人無之候、今年ハ南中奥辺并西方山根通作方多く、随分能作、出沢山也、

十月中の直段　三連より　五・六連

一当分此辺之品上四五百目位より七百目

小(小梨)なし・千厩、宜品九百目位、此節買人無之

全体ニ余り高直也、追々下候、

十一月七日、作夜（昨夜）ハ暖気ニ而、相応の雨降、今日晴、弥々暖気、節不相応、雪ハ一円無之候、八日夜寒く、小雪ふる、

一此頃中子供角力より長者迄大ニ流行、稽古し而大角力の如く見事也、

一生糸者、佐羽屋も一円買留ニ而、外ニ買人無之故、村々町々一統迷惑致、金通ニ困る、尤下直ニ而も払度容子也、（過ル四日取都之分弐駄ニ而登る）

一京都表又々騒ヶ敷事、西国長州方大勢ニ而上京、其子細ハ未タ不分りニ候得共、（欠字）御大名様方拾八公、国主ノ御方、直参ニ而上京致候様ノ御条被仰渡候由、当　屋形様ニも御上京之御支度ニ而、御供之御人数被仰出候由相聞へ候、江戸表者、御旗元・御家人拾石已上一宇為指登候由之御首尾合到来、段々御登り被成候由也、依而交易糸方取行見合ニ相成候故、糸買人無之候、

一鉄ノ新大銭相場者并同小銭多く、此節気仙沼ハ金壱歩ニ壱貫八百文位ニ落候、

十一月十日

一鉛買入ニ而戻り直段金壱歩ニ六百廿五目、来月より又直上りニ相成候由也、

一米直段、岩ヶ崎ニ而六升五合、涌津町六升少々抜候、四斗入弐表、

金拾四切

ニ而、追々緩ミ下候方と申候事、当町者四升五合也、一ノ関五升五合、糯五升

十一月十日、十一日、至而暖気也、

一大豆、当年相応ニ取納、当時何方も糸不売、金不足ニ而買人無之、下落、七貫弐百文ニ成、

一蕎麦者売人不足ニ而高直、八貫文

一小麦者九貫文

—国分玄場（玄蕃）表書　御城下より之被相下候手紙之内ニ在之写取

一当今形勢一大変之事出来、土州侯王政復古之大雑論ニ而、幕府江切（ママ）逼、早速御決答無之候ハ、討幕之趣向ニ相見得候、幕府も孤立と相成、只紀州侯計尽力ト相見得申候、薩長之激臣伯妙（伯州）大山江屯集、九州辺如響応シ申候由、第一之縄張ハ薩と相見得申候、

是写ハ後藤庄左衛門と申仁、京都ニ罷在候当先生之方へ下候紙面ニ有之、

其後幕府兵備十分不行届、頗苦心ニ而、将軍職御辞退相成、王政復古江相成

候由、飛輿到来、
屋形様来月中旬ニ御上京之訳ニ御座候、依但木・石田両太夫御供被仰付、三好殿若老并御供被仰付候事、
大樹公并会津侯遇殺害候風説有之、実事不分明ニ御座候、

十月朔日

一十二日御地頭様若殿廿五之御祝義被下候事御百姓中へ御酒　金壱歩と、
一新葉煙草下落、秋中四連之品七連位、三連之上物五連位之見当、糸不売、何方も金不足ニ而買人無之、三十年先凶年以前ハ、金壱切三四分より、追々壱切半也、
一硫黄大高直　拾弐貫目入壱俵
　但他国江向分　銀百六拾匁
一かう（椿）す　金壱歩弐貫目位、生中干也、
一地大方紙　五十入中金拾切也、
一同三拾枚折百入壱丸金六切也、
　至而高直ニ而、店ニ仕込売方六ッ敷困り居候事也、料紙共ニ右ニ順し候、

一明し油　金壱歩四百八拾目
一薄衣米相場納金拾壱切と下直ニ成
〆

十五日、昨日日和、暖気、夜雨ふり、今日朝晴、弥々暖気ニ而如春、二月之節不相応、余り暖気大南ニ而雨気也、此頃雷勢少々在、雪一円無之候、併冬至者当月末、暦表ハ昨日大雪之節ニ入、大ニ行違候、

上方騒ヶ敷、仍而交易糸取引休ニ相成候由也、生糸不売、国々大ニ因(困)り、金通無之候、

佐羽屋客壱人、気仙取都、今日参居候所ニ、御城下より飛脚下着、糸方弥々不宜、早速登候由申来る、伊達も浜付糸百八拾両ニ而も当時買人無之由ニ申来候、仍而藤助殿も取仕舞、十六日出立登候、大下落と成、此辺ハ弐百七拾両八十両位ニ而売気ニ成、

当十五日ハ昼四ツ過より夜迄雨ふり、十六日晴日和風也、

高清水之　京都迄但木土佐様也

一此度過ル十二日右母田勘解由様急之御登相成候由、何方迄と申義未タ不聞へ、屋形様ニハ正月御発駕可被遊由相聞へ、御家督様者伊予ウ和島（宇和島）伊達遠江守様より御貰ひ被遊候由相聞得候、

御地頭様御登り

十八日日和、十九日風寒シ、晴、曇り、廿日寒也、曇り、雪不降、楽なる冬也、

一米者袋米相出、五升壱歩ニ下る、

但問屋ハ四升三盃也

一此頃別而御役人様御下り、商人共生糸買入分書上候様被仰渡候ニ付、貫高買入分書上候、右之外諸品産物類大凡御聞取、御調書ニ成、右ハ生糸沢山有之、不売ニ而、諸上納金小前行当候由ニ相聞得候所、何程売抜、何程位残り相成候哉、為御覧之と御談シ有之候、当年之糸出高者、大凡五百駄ニも可相成由、未タ三ヶ壱も不売、東山ニ六十駄余も相出候内、廿駄位未タ不売と申候、気仙ハ四十駄已上之内、拾駄も不売、外右ニ準シ残り多く、金融通無之故、煙

草等一円此程不売、下直ニ成、中奥共ニ糸多く残り、為夫か米も下る、繰綿も御城下表より下直ニ成由、当地辺札ニ而十八目之所、此頃廿目ニ成、

魚類ハ不漁ニ而高直、鮪ハ此頃一円不漁也、

先月中より出売ニ成

一涌津町新酒拾盃金壱歩也

随分相応之酒也、壱盃百六十文

当郡者造人未タ不聞得候、

一御地頭様方御相場左ニ

一米者金壱(カ)歩ニ四升七合半

但俵直し拾壱切七分位ニ当る

一大豆　同壱斗一升

但俵直し金五切位ニ当ル

〆

右当町市中相場直段、米者小手米直段五升ニ相成、右御相場ハ高し

但此御相場高直ニ而取立兼候由申上、地肝入中此節留主ニ成、

十一月廿日上日和、昨夜雨、時雨、今朝ハ風替而霜ニ成、余り雪も無之、緩々敷冬なり、夜ニ雨ふり、

写

我　皇国時運之沿革ヲ観るに、昔天網紐(王綱)を解相、家権を執而、保・平之乱政祖(権脱)家ニ至り、更寵眷を蒙り二百余年、子孫相受我其職ヲ奉すと(不分)雖とも政刑ヲ失ひ(ふ)不可(ママ)少、今日之形勢ニ至り候も、畢竟薄徳之致処、不堪慚懼、況や当今外国之交際日々盛ニより、全朝権(愈)(一脱)途ニ不出候而者、網規(綱紀)難立候間、従来之旧習を改め、政権ヲ朝庭(朝廷)ニ帰シ、廉々(広ク)天下之公儀ヲ尽し、聖断を仰キ、同心協力、共ニ

皇国を保護セハ、必海外万国と可並立、我　国家ニ所尽不過之候、乍去猶見込之儀も在之候ハヽ、聊忌諱ヲ不願(憚)可申達(聞)候、

右十月十三日於　二条御城、大目付戸川伊豆守殿江相渡候事、卯十月廿三日従　京都御早到着、

別紙之通被　仰出候ニ付而、被為在御用之義候間、御上京可被為有御沙太(沙汰)之事、

十月

祖家已来御委任厚　御依頼被為在候得共、方今宇内之形勢を考察、建内(建白)之旨趣尤ニ被思召候間、尚天下与共ニ同心、尽力を以奉(ママ)皇国を維持可奉、安宸襟御沙汰之事、

写

大事件、外夷一条、尽衆義、其外諸大名伺被　仰出等ハ　朝庭(朝廷)於両殿(両役)取扱、自余之義者諸侯上京之上、御沙太(沙汰)可在之候、夫迄之処、徳川支配之地常ハ(市中)取締り等ハ、先是迄之通逐(追)可及御沙太之事、

右ニ付御国許ニ而被仰出写

御留主居御呼出之上

公方様御建国之趣被聞召候ニ付、御用之義被為在候間、早々可被遊　御上京旨御沙汰之趣、別紙写三通之通、御書付被相渡候段、京都より申来、仍早速被遊　御上京旨被仰出候事、

廿三日、此頃日和続、廿四日同、両朝者寒也而霜下り、西根山ニハ雪相応、里ハ一円ニ無之、如春之なり、

一麦草、生のひ過候由也、
一薄衣納米相場所方(諸方)緩、追々下直ニ成、此節金拾切半位ニ成、
一大豆是又緩ミ、七貫文位ニ下る、仍而とふふ廿文ニ成、併至而小キもの也、
一莢(莨)も買人無之、何分売進候、
一清酒ハ、涌津町新酒計りニ而、御差留ニ相成候よし、
一生糸ハ、一体ニ三ヶ壱も不売、此節買人無之故、金通無之故、諸品右ニて下落ニ相成風なり、
一米相場追々下り、古川町ニ而八升壱歩と成、外七升より六升五合、道中筋旅籠代七百文より八百文、
一御城下繰綿下る、三拾弐両之所弐拾六両五両位、壱歩ニ百目位、
一下直ニ成品ハ、生糸并砂糖類、
石之巻米者七升より七升五合迄、

一屋形様御事、京表但木様より御註進次第、来月中旬御発足被遊候御支度、御供御人数被仰出、大番組より抜人ニ而三百人被仰渡候由、御入料代御見詰ハ六双倍江五割増と言、百文之所六百文ニ、三百文惣高廿万両之御見詰と申候、御人数真高未タ不知、

一御貸上金被仰付候事

御城下へ一万八千両と申候

御郡方へ四万弐千両と申候

一御郡方割合人頭壱人ニ付米九升ツ、五升と申候

米ニ而御割付、高壱貫文ニ付米壱斗七升ツ、、当時壱歩ニ五升、人頭分ハ金弐切位也壱歩位

右之通御割合被仰渡候由也、

此節糸不売、莫(莨)共ニ同様ニ而金不通、一統迷惑之所へ、御貸上御割合被仰渡、前ニ印候通、御内之御相場高直ニ而、地肝入三ヶ村共ニ取立兼候由申上、当時皆留主ニ相成、家ニ居合兼、他出致候、

右両条之上納ニ難義、一寸取都相成間敷候様子也、

曇り、雨気也

十一月廿七日朝五ツ時冬至ニ成、此頃者如春之、二月末之気候至而暖気ニ而珍敷冬至なり、来春余月有之候得共、余り暖気、雪一円里ニ無之候、床敷冬なり、来年如何と案し候、

一当年生糸出高之事

東山分六拾駄、此数弐百四拾箇也、

秋中之直段金三百両前後壱箇ニ而、

此惣高金七万弐千両也、

三百両ツ、

弐百八十両位より　内大凡弐拾太程売ニ抜

三百両　　三百両ツ、此金弐万四千両也入

三百廿両迄売る

残百六拾箇、先直段ニ而ハ四万八千両也、

右未タ不売残り分弐百五十両ニ見詰、此金四万両也、八千両之損金也、

右見詰ニ候得共、何程下落ニ而商ひ相成可申哉難計候、上方騒キ慎(鎮)り次第也、如此金支、クツミニ相成候間、不融通也、

右之通、当郡ニさへ常年より五割方余慶ニ相出、御分領中惣高五百駄も可出
由ニ相咄候、夥敷金高也、後年咄之種ニ印置候、

十二月朔日曇り、何分南風、雨気、十一月中冬至ニ相成候而も、一円替り無之、
雪降り不申而、折々雨馴(ママ)共、大雨無之、井戸水不足ニ相成所多シ、麦者生立過
と申候、何年ニ茂無之暖気成冬至中也、仍氷(凍)とふふ并しみもの出不申候、二月
下旬之気候也、早き年之三月初福寿草花咲、梅者莟ヲ模様(催)ス、

一おさわ初産、廿九日夜五ツ時女子出生す、大ニなやむ、産後三度程血を上而、
家中心支ス、薬療ニ而血定り上気鎮る、翌日安平ニ成、

二日、昨日今日雨降、弥暖気なり、

大坂より来る書写

九月上旬より、西国多人数引連上京致、屋敷々々ハ堅陣之如相備、其面々ニ
ハ

七十五万石　四十五万石　廿五万石
嶋津大隅守　松平安芸守　松平土佐守
十万石　三十二万石
伊達遠江守　松平備前守

禁裏守護被致候処、一橋将軍兵庫湊交易御指許被遊候ニ付、右五大名、二条之御城江御詰掛事ニ寄而ハ、一戦相初候様子ニ付、市中老若男女皆々逃去、以之外騒動仕候内、一橋公
将軍職御返官被成度義被仰上候ニ付、先以相慎(鎮)り申候

一九月中旬より、何与無雨模様ニ成、最早雨降出候半と存候処、雨ニハ無之、大神宮之御祓并八幡宮・春日大明神・天神宮之御守札、其外日本六十余州之諸神仏之御守札、大黒・両(恵)美寿七神之像、白銀之仏木像御降申候、尤美濃・尾張・三河・山城・大和・摂津・近江・東海道辺江も御降被成候、其外慶長金古金・弐朱一朱銀・当百銭四文銭等、夥敷御降被遊候、東海道馬士駕籠屋抔者、朝より酔つふれ、金銭者いらぬ顔して居申候、誠ニ前代未聞、日本開ひやく已来其様之事無之、何れ世直し之印と奉祈上候、

大坂
小橋四郎右衛門
半七

大坂符長(ママ)掛直多く在□申候

右之金銭、御大名様方御上下ニ而ハ、天より降候と同様ニ而、上方江ハ沢山可集ル也、木曽海道、殊ニ東海道者、大小之諸士方引も不切往来ニ而、早々早目々々金銭如石砂之まき散シ、百文銭六百文ニ当ル御見当ニ而遣被通候由ニ候間、天より降と言も当り前之事ニ候

一繰綿大下落　仙府ニ而十一月迄三十弐(三)両之所
　　此節廿弐両ニ成、
　　福島ニ而拾八両弐分と申候、

右ニ准し木綿も追々可落容子

高直之綿ニ而仕出候間、是ハ少々延可申、

一御郡方相場左ニ

一米七切弐朱金歩ニ七升五合位ニ当る
　右金銀与不分

一大ツ　四切四分壱りと相聞へ候、

一代　壱貫六百文ニ而此節銭余慶ニ付

貫さしニ而壱貫文ニ五十文さしニ相納渡御吟味相成候由也、
壱貫八百文相場ニハ不相成如此、
壱貫六百八拾文之割ニ成、

右御穀之相場御分領中御割並、気仙・中奥・御城下・南、歩ニ違在之由、御給所共ニ其御郡一統上納致候様ニと、御代官様御談在、定而御向々御首尾合可相成、当御地頭様方余り高直ニ而、百姓前不服故、未取立不成居候、定而御首尾合通ニ可相成候、

御上ニ而ハ、京御入料等被仰付候間、御年貢方一統下直ニ被成下候物ニ相見得、併上納ハ可急也、

十二月三日大ニ暖気、上々日和、大如春之、此間者蝿（ハイ）も相応ニ出、福寿草も花咲、野の草も色青く成、春の景気ニ相成候、四日風替り、雪ニ成、五日も少々さら〳〵雪、薄雪ニ而則消る、是より寒く成、今朝ハ氷ニ成、

六日明方赤坂裏小家壱ツ御焼、朝火事大ニ騒く、壱軒ニ而消留候、当肝入忠左衛門殿小家也、

今年十二月与太助生ると在之候、武右衛門先祖ニ候哉

一享保九甲辰年之暦在之、当年寒中雪無之、二月末之如く暖気、雪少シ、一度ふり日中ニ消る、秋ニ至米直段誠ニ下直也、金壱切ニ八斗弐升より七斗五升迄、大豆壱石壱斗より壱石迄、今年至而諸作毛上々ニ而如此也、六月廿五日より此日より三日三夜大雨、廿六日洪水、北上川筋町々共ニ居家押流　当年八月廿一日より廿八日迄八日之間くゑ日続く、右之点ひ（占カ）、国家之騒動と申由、尤古もケ様之事在之、不宜候ニ付、　将軍様ニも被　仰上候ニ付、　京禁裏御所ニ而　御祈祷被遊候上、張札等相成、何事無之済候事と暦ニ書入在之、珍敷古暦ニ依而、書入之所写取、

十二月三日

一中新田徳治御主人中嶋屋治兵衛殿御入来、徳治市懸ニ而気仙迄罷越、七日帰る、御主人滞留而応対、而御主人八日出立帰る、浜方も至而不漁、

一福島油屋買先菱沼屋傳之助殿、為糸場へ一見之、廻り入来ス、伊達辺も弥々江戸浜不（横浜カ）売ニて大下落、百八拾両ニ而買人無之由、当地も一円不売、一統迷惑ニ而

客人江進め候得共、佐羽屋持ニ付、尤先々不印ニ而買入不申候、此辺也此節八百廿五両位ニ而買入ニ可相成容子ニ相成(カ)候、金入用ニ付、此度外々より被相頼、弐箇程持参、宗兵衛御城下へ登る、質入之吟味手配なり、何分大下落、佐羽屋も買取ニ而迷惑いたし候風也、郡村上納金ニ指支、御上よりも御責付成由、村々一統金切ニ而上納致兼候、商方ハ都而大不印、都而売内無之候、米穀追々出、諸品下直ニ成、

一十二月七日、三日前より寒く成而、七日今日相応之雪ふり、漸々冬之風ニ成、併八日暖気、

一米五升五合位　一大ツ六貫文位ニ成　上もの

風米下品六升位迄内証

薄衣買納米直段も追々下り、九切位ニ成

五寸位ツ、

八日、九日、十日、夜々雪、十一日朝寒気ニ成、市々者何方も金無之故不盛、商売無之候、十三日夜緩ミ、雨ニ成、十四日大雨、夜迄、十五日も終日小雨ふり、大ニ暖気ニ而、海道共ニ大ぬかり、代田の如シ、通用甚難義、是又珍敷暖気緩ニなり、同夜雨、後雪ニ成、一円氷り不申候、

此節米持并其外共ニ金銀無之故、米売進候得共、金無之故、六升之上米ニ而も買人無之候、諸品共ニ同様買人無之候、然ニ浜方至而不漁、肴小魚□(類カ)不足ニ而、肴類ハ甚高し、給られぬ世の中也、依之諸上納一向取都り不申由也、店々諸商ひ弥々無之、市町不盛可申様無之候、

十六日晴模様ニ而曇り、矢張暖気也、小寒十二月の節ハ過ル十二日、大寒廿七日也、大分後レ候年なり小手袋米、大豆等者五貫五・六百迄、十八日晴曇り、十九日朝寒く氷り、

小用達

諸相場

一米者六升袋米相出候、併金無之、米売人ハ多く、買人無之候、六升五合ニ而も買人無之候、

一大ツ（大豆）、追々下落、六貫文買人無之、五貫文位迄落る、買人無之候、

黄海二日町ニ而、川向より参候糯米買人無之、漸々御無心手配ニ而、六升五合ニ而壱駄売候由也、

大原町ニ而粳米八升迄落、買人不足、一体ニ金無之故、右直段ニ而も買兼候由なり、

薄衣買納受米も買人無之、九切半位迄、何分生糸（莨）等之産物不売、故ニ一統金詰ニ相成、下直ニ而も買兼ル、

一繰綿、追々下落申来ル、御城下ニ而余慶不下、先仕入在、大損ニ成故、未タ不下候、

一当町方濁酒者、八拾文ニ下る、

一御地頭様方御年貢高直故、村方より御直下願ニ而、未タ御取立不成、尤村々金無之、及難義ニ候由也、御郡直段ニ願、

一小豆者、一俵八貫文、不下、

一蕎麦も八貫文

是者賄ニ成、米之助と成故、売ニ相出不申候、不足故高直也、
一米者、問屋直段五升五合、上也、
但、問屋直段高直故、内証ニ而少々之袋米小用達之為ニ売、
〆明油、壱歩ニ四百八拾目より五百目、
一大方紙、五十帖丸金拾切、壱帖三百廿文、
上々
一料紙、店売ニ而一束七百文より六百文
五百五六拾文
一楮者下落ニ成、近年畑ニ而買入、
但此月ニ成下落、大ニ損金ニ成由、
〆右紙類、此節より下落之容子ニ成、

過ル十八日之夜、藤勢寺へ強盗三人推入、和尚江左右より取掛り押へ留、金子借受度、有所可被相咄由申、内壱人ハ廻り翔行、不得止和尚様有所被相咄、箪笥・長持等よりサカシ出、金代ニ而六両余、衣装三品、品々米迄持出取られ、大ニ御難儀被成候得共、先御身之上ハ、御小僧共ニ御無事ニ而、大慶と被申候次第也、誠以恐敷事也、

一石之巻牧山御寺ニ而ハ、同様盗賊押込、和尚ヲ殺害、金子を取、立退候由相聞へ候、

〆

十九日日和ニ而も寒シ、夜氷る、廿日朝ハ相応ニ氷る、廿一日朝より寒気ニ成、

一屋形様、京へ来春御登被遊候ニ付、御賄ひ大根漬ニ成置分、桃生郡辺ハ生大根人頭壱人ニ拾五本ツ、指上候様被仰付、石之巻ニ而漬方、船積ニ而大坂江為御登之御首尾と申候、

一宗兵衛事、過ル八日糸弐箇程持参、外々より被相頼候分共ニ金借ニ登仙致候所、佐羽屋之衆中、内々ニ而登り、留主中ニ而不分、別而相頼才角（才覚）、未タ相弁不申候、滞留致困り居候由申来る、外々よりも才角方登り候、衆中も御城下も金不足ニ而不出、御郡へも一統金詰り、此節諸上納方行当り、大騒キ也、右ニ付米売も相場等へ不抱、六升五合、七升ニ而も、行当り之者ハ売候次第、殊田地等売渡候者、所々ニ有之、又持人も不足、去年中者望人多候得共、田

畑渡候者無之、当年者直段も大ニ安く相成候由、新田畑起ス者多シ、
一生糸請負人佐羽屋も、買方も不成、今更止候様も無之、大困り之様子也、国中大困りニ候なり、右之次第天変ニ而、商ひ物買入ニハ都而損益多し、此節村々御年貢納方延引ニ相成、御責付メり役等被相廻候得共、銭之在分ハ、銭ニ而も納ニ相成、尤さし銭等ニ而可応候得共、銭ニ而ハ不相成由、追々被仰渡、尤御郡々々より登候銭、大駄数ニ而、千厩・大原両所納る銭、毎日廿駄・三拾駄登、依之道中筋より難儀相及候段願申上候ニ付、銭納不相成、金納ニ被仰渡候所、元より金不足無之ニ付、銭ニ而相納候間、何分ニも小前納方難成、其義ニ付色々故障出来候而、村々大ニもめ合多し、正月中ニ者納相済厳敷由也、

当御地頭様方ハ、御直段御吟味中ニ而、見詰納ニ相成候、是又未不済、

一十二月廿六日大ニ寒気、昨夕より雪少々ふる、氷り物出来候也、相応氷りニ成、此間ハ天気曇り勝也、廿七日、今日大雪之暦表書ニ候得共、大雪無之候、

奥郡糸出持合之御郡ハ、番(悉カ)く金札等ニ詰り、肝入衆并御代官様共々、御役付方御困り、郡中難義いたし候、町々市々不盛、売内誠ニ以無之、大不印、

一去年ハ酒方厳敷候得共、かゆの銘ニ而所々在之、高直ニ而も呑者多く、酔潰れも相応ニ有之候所、当冬ハ米ハ有而も、金銭無之故か、酒も不売、酔而通る者無之由也、

当御郡ニ、清酒ハ一円無之、余郡共ニ御留ニ相成、濁酒計也、当年者金之凶年也、

一当町ハ壱盃八拾文　一とふふ廿文

一米ハ五升五合、内々ハ勝手次第、六升五合

一大ツ者金三歩位、落申候、

右之外諸品追々下直ニ成、

一繰綿追々下落、当町金壱歩ニ百目ニ成、改正札ニ而廿四目位、伊達相場壱本金廿両より拾八両ニ成由、右同所ニ而も糸不捌ニ而、一統金詰り、尤壱万両・弐万両位糸方損金之衆在之由也、関東・上方共ニ金不足、糸ハ横浜不売、殊ニトロ金下落故、糸壱箇宛(カ)百両程下落ニ成、此間少々トロ金相場直り、銀四拾匁五分位ニ成、少々引上る由也、当秋ハ大坂表ニ而買入候由也、繰綿ハ異国交易御指留ニ相成故、下直ニ成由、追々江戸より諸方へ注文ニ不抱相送下

候由也、木綿も仕入元金より一割七・八分下ケ売方致候由、御城下店々江申来ル由也、

一江戸表、米両ニ弐斗四升［　　］

一福島近辺ハ、両ニ弐斗弐升［　　］

一江戸道中近辺ハ壱貫弐百三百文段々
上中はたご
素宿

一仙台御領　はたご壱貫百文位弐朱位
八百文より七百五拾文

一大坂ニ而米五升五合位之由、存之外下直、
歩ニ

伊達辺之大株、兼而金持と申糸師仲間、此節金ニ行当ル程詰、諸上諸納ニ行当候ニ付、糊ヲ引、米ヲ売、御年貢等上納致候由也、綿・木綿・古手等売急キ也、江戸表若異国人御相払、合戦ニも相成事難計、仍而持合之品ハ売払之心懸と相聞へ候、焼而も、損し而も、新敷普請不致と申事也、尤御屋敷く御相手次第売払と申事也、

一一ツ橋将軍様ニハ、御隠居ニ被為成、二条之御城中へ御蟄居ニ被為成候由、禁中之御政事ニ相成由、大古ニ復と申事也、

一屋形様御事も、正月御発足御心懸ニ而、当廿八日海上船ニ而、三百人御侍ひ被相登、正月早々五百人同船ニ而御登之由、専御支度也、三切四切ニ而、都合三千人抜人ニ而御撰被遊候由也、寒沢（寒風沢）浜より乗出候、

一江戸表、将軍様も無之、御政事御行届無之故カ、浪人組又々起り、村々乱放致候ニ付、御向々達ニ成、兼而之向役八州廻り之御人数差向、制シ候所、人数も浪人組大勢烈敷候故、御向役不叶、仍而近国之御大名方へ被相頼、三頭程御出張之処、浪人組之者共申ニハ、何百人ニ而も恐候事ニ無之、併軍ヲ致候事ニ無之候、我々今日之浪用弁候得ハ不構候由ニ而、一向立去、上州之方へ去行候由、右様之次第故ニ、道中筋昼夜共ニ、追剥又ハ強盗多く、所々ニ而被推取故、壱人旅ハ難成候、関東も不納世と成、

一屋形様御事も、蒸気船公儀御船ニ而江戸より壱万両御求め被遊、右船ニ而正月五日頃御出立ニ而、海上大坂迄御登被遊候由、壱説ニ壱万人とも相唱候、未琁不分候、陸通ニ而ハ大金御入用ニ付、七分通海上ニ成由、過ル廿八日之三百人ハ、御

行烈（行列）ニ而御通也、併異国風縫詰・鉄砲・着ケン筒鉄炮ニ而御通と申候、是ハ異国随順之躰ニ而不面白、西国方之御了簡と行違、如何之思召ニ候哉、不分なりと申候、屋形様御登り方へ不面白と、色々御吟味在而、御陣言被仰候由也、

一御郡々之御年貢諸納、冬中皆済不成、所々村々ニ騒敷事共多、御役付中も大困り、諸納金正月中かゝり候共、皆済見詰不立容子也、当月初、折壁村中、室根山へ取集り、金太鞁ニ而大勢大騒キ在、仍而役々御代官様迄御出張、御聞届ニ成、右ハ御地頭様方御年貢相場高直ニ而、御引方、尤御郡相場下直ニ付、右御直段願候所、御聞済無之故、右之通騒動致候由、仍而是ハ御郡直段ニ而御取都相成候様御懸合ニ成、百姓中ハ騒動致候ニ付、御呵と成而相済也、

一御城下も又当座御貸上壱万両被仰付候由ニ而、店々拾人衆・融通組之衆中迷惑致候由也、然ニ江戸御用金より御下候金、此間京屋持壱万両替ニ及而着之所ニ、荷馬よりおろし候内、五千両之箇壱ツ被盗取候而、大ゐニ騒キニ得候得共、翌日迄ニも不相知候ニ付、当惑致居候由也、何様弁納致候外無之御用金也、大変成事なり、

一廿八日市、相応ニ人相出、盛候得共、商ひハ無之候、

一肴類不足高直、田作り小一升弐百文より五十文迄、だふ片前ニ而四貫文、朝

之内弐貫文、不足ニ而上る、肴類不足故、早く［　　］、

同夜緩ミ雨ふりニ成、廿九［　］至而暖気、如春走之、夜大風替りニ而、大晦日朝明方より寒気ニ成、小雪さら〳〵、道中大ぬかり、暮方より氷ニ成、当町肴不足ニ付、千厩町ニ而買入之含ニ而参候処、是又弥不足、高直ニ而、鱈弐貫前後、なめた壱疋三百文位、昼四つ時頃さつはり売払ニ成、遅キ人者肴を買兼戻る、肴計りハ、何程高直ニ而も売候事と申候、仍而肴・禽類争而買取、雉子抔ハ六百文より七百文、何年ニも無之不足、高直と申候、若水桶不足、料紙不足、右之外ハ商ひ無之候、

諸勘定取引之事、是も何年ニも無之不取都、乍去全躰人々奢り成世柄故、四・五十前とハ大違、都而上品ニ成、在々ニ而も土瓶も専ら用ゆ、女共近年天窓之飾り本田形百文位之品、節かんさし弐百已上之品を用、前かけハ唐さん下り物ヲ買入用候也、男ハきセる五百文一朱位、三百文ハ至而安物ニ而、上ハ弐朱壱貫文位之きセるを用、莨(煙)も金壱歩位より一歩弐朱、弐歩位之品用ゆ、併余品ハ右之様ニ数品不用、誠恐入たる事替也、五拾文、七拾文、百文位き

セるハ、死送之他無之候、

一宗兵衛事、同夜ニ入帰宅、御城下ニ而金配、糸指向候而も、外ニ而不分、「木」ニ而少々かり受候所、福島へ罷越之所、途中ニ而油屋之伝作殿出合、相談之上、同道ニ而下り着、

伊達も江戸并諸国共ニ金不足ニ而、人々難儀之由、世上一統也、生糸ハ江戸表壱万駄程不売残り、在異人共買入生糸、去年より如山の船積入置、人々ニ見セる糸ハ夥敷在之由、仍而不印也、何レ百両余之下ケニ而も不捌、其内仙台糸ハ少々望ミ有之容子ニ而、油屋より別段取抱ニ而少々買入之含ニ而伝作殿下る、佐羽屋方ハ不買、御城下ニ留主居壱人残皆登る、交易方もトロ金相場下り、当時壱両分ニ三十八匁外と申直段ニ而、糸其外共ニ国方金手取不宜候、トロ直段四十匁、四十五六匁なれハ、手取宜、

一繰綿等、国方不足高直ニ付、御指留ニ付、追々下落之所ニ、今年綿之作上々ニ出来、殊ニ諸国作方多分出来候ニ付、弥下直ニ而、江戸江夥敷荷入着、仍而諸方江注文無之候而も、送荷候而、下り又ハ商人衆買入而下り、仙府此節諸人之入荷高、外店々持合共三千駄余在之由、仍而在々徳(得)意中へ送荷下る、併

何程下落相成哉も不知容子ニ付、人々下落を見合、旧冬中不売也と申候、

一当時綿金壱歩ニ百目改正ニ廿四五目、御城下ニ而ハ先分損金ニ而、壱本廿四・三十二両之所五両より廿弐両位、福島ハ廿弐両位より拾八両位と申候、大下落ニ成、正・二月ニ相成候ハヽ、仙府も同様下り可申候、木綿追々下直ニ可相成候、当分之損物ハ生糸、次ニ繰綿、世上一統持合分大損金也、金詰も諸国一統詰る成、買入之品ハ何品共ニ損金ニ成、

此近辺葉莢(莢)先買入五割余、七割倍之損、

一穀物も追々下直ニ成、江戸表両ニ弐石四・五半より弐石程、

福しまも金壱歩ニ六升より五升五合、秋中ハ四升位三升七合、同所大ツ七升高也

仙府ハ七升壱歩、古川辺九升、若柳八升、

一御城下表肴高直者無類也、御城下始より無之大高直、中見世商ひ不印、福島ニ而ハ田作小壱升六百五拾文、余ハ右ニ准る也、右何茂珍敷高直也、古ハ此辺ニ而小壱升三十三文位也、

一屋形様御発足、御買入之蒸気船未不相廻、延引ニ付、御出立御延引、御供中も御指留也、然ニ京・上方ハ弥騒動、合戦有之候間、当殿様ニハ御家督未タニ無之候御身ニ而ハ、右戦場へハ御無用、御見合被遊、早速御嗣子様御定め被遊候上、御上京可被遊旨、御早打仙着ニ付、大晦日限り御一門様中御一統御早ニ而御登仙、道中大取込之由也、　将軍様ニハ北国方へ御しのひ被遊候由、京守護職会津様は西国方之御相手ニ成由也、追々如何、何様国方ハ御金ニ困る、此辺ハ遠奥ニ而、合戦等無之［　　］宜く候、

浜々漁事無之凶年より六ツ敷、［　　］

御郡々村々、御年貢より諸納半納ニ而、越年ニ成よしなり、